

# 檀越某御返事

弘安元年四月一日 五七歳

御文<sup>おんぶん</sup>うけ給<sup>たま</sup>はり候<sup>まう</sup>ひ了<sup>おわ</sup>んぬ。

日蓮流罪<sup>さきざき</sup>して先々にわざわいども重なりて候に、又なにと申す事か候べきとはをもへども、人のそんぜん<sup>損</sup>とし候には不可思議の事の候へば、さが候はんずらむ。もしその義候わば用ひて候はんには百千万億倍のさいわい<sup>幸</sup>なり。今度ぞ三度になり候。法華経もよも日蓮をばゆるき行者とわをぼせじ。釈迦・多宝・十方の諸仏、地涌千界の御利生、今度<sup>見果</sup>みはて候はん。あわれあわれさる事の候へかし。雪山童子の跡ををひ、不<sup>せつせん</sup>輕菩薩の身になり候はん。いたづらにやくびやうにやをかされ候はんずらむ。をいじに<sup>老死</sup>や死に候はんずらむ。あらあさましあさまし。願くは法華経のゆへに国主にあだまれて、今度生死をはなれ候は<sup>ゞ</sup>や。天照太神・正八幡・日月・帝釈・梵天等の仏前の御ちかい、今度心み候ばや。事々さてをき候ぬ。各々の御身の事は此より申しはからうべし。さでをはするこそ法華経を十二時に行ぜさせ給ふにては候らめ。あなかしこあなかしこ。

御<sup>仕</sup>みやづ<sup>言</sup>かいを法華経とをぼしめせ。「一切世間の治生産業は皆実相と相違<sup>いはい</sup>背せず」とは此なり。かへすがへす御文の心こそをもいやられ候へ。恐々謹言。

四月十一日

日蓮花押